

ラジオNIKKEI ■放送 毎週木曜日 21:00~21:15

マルホ皮膚科セミナー

2019年2月21日放送

「第67回日本アレルギー学会 ① 教育講演2

接触皮膚炎：日常診療で知っておきたいポイントとは」

藤田医科大学ばんだね病院 総合アレルギー科
教授 矢上 晶子

はじめに

本日は、接触皮膚炎 日常診療で知っておきたいポイントについてお話しいたします。接触皮膚炎は日常的に遭遇する疾患です。原因となる物質は多岐に渡り、また、新しい製品も日々開発されていく中で、今後も予期せぬ皮膚障害事例が発生することが予想されます。

接触皮膚炎は、いわゆる「かぶれ」です。外来性の、主に化学物質が皮膚に接触して生じた皮膚の炎症と定義されます。光毒性や光アレルギー性の接触皮膚炎の患者さんもいらっしゃいますが、主には、刺激性もしくはアレルギー性接触皮膚炎の患者さんが受診されます。

刺激性接触皮膚炎

まずは、刺激性接触皮膚炎について説明します。刺激性接触皮膚炎は、誰にでも起こり得る反応です。含有される物質の毒性により生じ、接触原の量や暴露時間に依存しています。農薬に使われる殺虫剤、殺菌剤、消毒薬、セメント、フッ化水素、洗浄剤・界面活性剤、有機溶媒により誘発され、臨床症状は皮膚の乾燥、亀裂、紅斑、症状が重篤な場合は、化学熱傷を起こします。

最近、問題になった刺激性皮膚炎として、スタンドアップパドルボート (SUP) の国際大会で配布されたTシャツによる皮膚障害事例があります。このTシャツを着た参加者に紅斑やヒリヒリ感が誘発され、これは、Tシャツのロゴなどを印刷する際に使った

薬剤の一成分「塩化ジデシルジメチルアンモニウム」が原因であることが明らかにされました。

アレルギー性接触皮膚炎

次に、アレルギー性接触皮膚炎についてお話します。アレルギー性接触皮膚炎を起こす物質は、単純化学物質であり、分子量は300程度の低分子です。原因となる物質は、蛋白質と結合能があり、蛋白質と結合して抗原性を発揮します。接触部位に痒みを伴う、浸潤を触れる紅斑や丘疹が誘発されます。

原因物質の検索には、パッチテストを行い、その反応により確定診断を行います。パッチテストは試薬の購入、調整や準備が大変であるため、日常診療で行うことが難しい面がありますが、近年では佐藤製薬のパッチテストパネル（S）が保険収載され、これは ready-to-use 製品ですので、検査を行うことが簡便になりました。

パッチテストパネル(S)には、金属、油脂、抗生剤、局所麻酔剤（外用剤）、香料、防腐剤、樹脂、ゴム硬化剤、ゴム老化防止剤（ゴム製品）、染料（毛染め）、水酸化合物（ワクチン）など、私達が日常的に接触する様々な物質が含まれています。

パッチテストが有用であった症例

ここからは、パッチテストパネル（S）が有用であった症例をご紹介します。


例えば、手荒れを繰り返している美容師の場合は、職業性アレルギー性接触皮膚炎が疑われます。理・美容師は日々、染毛剤に接触し、ゴム手袋を装着し、さらにはハサミなど金属製品を使用していますので、それらが原因物質となり、アレルギー性接触皮膚炎による手湿疹が誘発されることがあります。このような症例にパッチテストパネル（S）を貼付しますと、酸化染毛剤であるパラフェニレンジアミン、チウラムミックスなどのゴムの化学物質、金属である硫酸ニッケルについて確認でき、患者さんは皮疹が誘発される原因を把握することで原因物質を的確に避けることが可能になり、難治性の湿疹を根本的に治すことが可能となります。

次に抗生剤を含有する外用薬によるアレルギー性接触皮膚炎についてです。傷口などに塗布する外用薬でのかぶれを繰り返している場合、パッチテストパネル（S）を貼布すると抗生剤である硫酸フラジオマイシンが陽性になり、原因物質を明らかにできます。硫酸フラジオマイシンが含まれる外用薬による接触皮膚炎では、外用薬そのものを用いたパッチテストでは含有濃度が低いため偽の陰性となることがありますので、パッチテストパネルでの検査は有用です。

また、職業性の接触皮膚炎では、ペンキなどの塗料でひどいかぶれを起こすことがあります。このような場合もパッチテストパネル (S) を貼布すれば、電化製品の接着剤や塗料、コーティング剤に含まれるエポキシ樹脂が陽性となり、アレルギー性接触皮膚炎を確定することができます。

ここ数年注目されている接触皮膚炎の原因物質としては、外国製

化粧品やシャンプー、リンス、ウエットティッシュなどに含まれる防腐剤であるイソチアゾリノンがあります。この防腐剤では、美容用の顔面パックなどにも含まれるため、顔面や頸部などに湿疹を繰り返している症例にはこの防腐剤による接触皮膚炎を疑い、パッチテストパネルを貼布するとよいです。



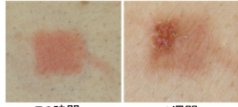
- ペンキ職人におけるアレルギー性接触皮膚炎
- ペンキに含まれる**エポキシ樹脂**が原因

パッチテスト: 結果

	72時間	1週間
エポキシ樹脂 (パッチテストパネル®: 佐藤製薬)	+	+
ビスフェノールAエポキシ樹脂1% (Brial)	+	+

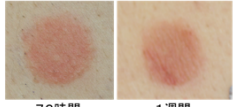
(ICDRG基準)

〈エポキシ樹脂 0.041mg/81mm²〉



72時間 1週間

〈ビスフェノールAエポキシ樹脂1%〉



72時間 1週間

未知の原因物質によるアレルギー性接触皮膚炎の解析

次に、日常生活で起こった皮膚障害でアレルギー性接触皮膚炎を疑った場合にどのように検索していくか、つまり、未知の原因物質によるアレルギー性接触皮膚炎の解析についてお話します。

私が経験した黒い衣類を着用する度に湿疹を繰り返していた患者さんについてご紹介します。患者さんは30歳代女性で、黒い衣服が好きな方でした。黒い水着や下着、衣類を着用すると接触部位に湿疹病変が出現するということでした。皮疹が衣類の形に限局していましたので、接触皮膚炎を疑い、症状を誘発した衣類を用いたパッチテストを行いました。

その結果、黒い水着や下着の貼付部位に陽性反応を呈しました。一方、花柄の水着や患者さんが使用していた手袋などは陰性でした。その後、症状を誘発し、パッチテストで陽性を呈した水着の生地に含まれている成分を確認するため独立行



水着を装着していた部位に一致して紅斑を認めました。



切り取った布を載せて貼布します



1 2黒水着

3黒下着 4

72時間後判定時は、黒色の水着や下着に陽性反応を呈していました。

(患者さんが持参した臨床写真)

政法人 製品評価技術基盤機構化学物質管理センター（通称NITE）に依頼し、黒い水着の成分分析を行っていただきました。そして、抽出された成分を用いて改めてパッチテストを行ったところ、製品の酸性染料に陽性反応を呈しました。この患者さんはその後、黒色の衣類の装着を避けたところ、症状が再燃されることなく過ごされています。

このように、未知の物質でも、専門の施設に依頼し含有されている成分を抽出していただくことで原因物質を特定することが可能になります。日用品や化粧品などの製品で陽性になった際には、もう一步踏み込んで原因物質を明らかにし、報告していくことは、本邦における皮膚障害事例を最小限にするためにも必要ではないかと思えます。

皮膚安全性症例情報ネット(SSCI-Net)

最後に、製品による皮膚障害事例を早期に発見し皮膚障害を最小化するための取り組みについてお話しします。

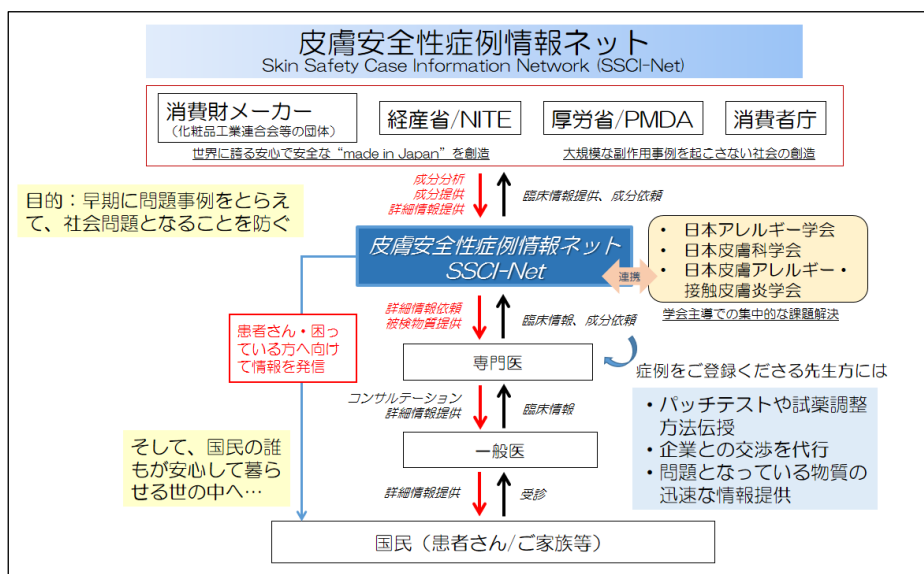
本邦においては、これまでに抗菌デスクマットによる皮膚障害事例、加水分解コムギ含有石鹼による小麦アレルギー、美白化粧品による脱色素斑など皮膚障害事例などが社会的に問題になりました。これらの事例を振り返ると、医師からの情報が迅速に企業に伝わり、企業がいち早くそれらの情報を活かして行動していれば、より早く解決に繋がったのではないのでしょうか。

このような考えを基に、2016年に、医学界と産業界の連携により、藤田医科大学アレルギー疾患対策医療学の松永佳世子先生を理事長とした、一般社団法人皮膚安全性症例情報ネット

Skin Safety Case Information Network (SSCI-Net)が設立されました。このネットワークは、化粧品や日用品などの製品によるアレルギー性接触皮膚

膚炎や接触蕁麻疹、刺激性皮膚炎などの症例情報を、皮膚科を専門としている先生方より登録していただき、医療者、企業、行政でそれらの情報を共有していく、という取り組みです。

ここ数年においては、本邦では皮膚障害が多発した事例はなく、引き続き、この取り組みが進められることが望まれます。



おわりに

今回は、日常診療で知っておきたいアレルギー性接触皮膚炎についてお話いたしました。今後も新たな皮膚障害事例が生じる可能性はあり、私たち医療者は患者さんの訴えに耳を傾け、症状をしっかりと見定め、原因物質を同定する的確な検査を行い、皮膚障害が早期に解決するように努め、さらには、それらの情報を企業や行政に報告していくこと、そして、その時々注目されている皮膚障害事例について精通して診療にあたることが大切ではないかと考えます。